

## 道教之研究(承前)

妻 木 直 良

### 第二章

#### 第四節 三教融和の趨勢

#### 第五節 唐宋時代の概説

#### 第六節 結 論

#### 第四節 三教融和の趨勢

北地に於て佛教破壊の大慘事を實行したけれども、南地に於ては融和し抱合するの趨勢が漸次に盛んとなり、道佛二教、若くは儒釋二教の一致並行を主張するもの甚だ多かつた。寇謙之、崔浩が全盛の時に當りても、南地には宋文帝(治世、西紀四二四——五三)の如き英主出て、四科の大學を設けて文學史學と並んで玄學即ち道釋の哲理を研究して居る。有名なる廬山十八賢の隱士たる雷次宗、宗炳、周續之の如きは、何れも老莊と易理とに達し三教の宗旨を實行したるものである。而も雷次宗の如きは正しく文帝の大學に關係し玄學を教授したるものであつて、道士顧歡(宋元嘉年中の人)の如きは、その門人である。若し南地に於ける

三教調和の意見を持た道士を舉ると、宋及び齊代に亘りて顧歡、孟景翼の如きあり、梁代には陶弘景の如きがある。同じく宋明帝時代(西紀四六九頃)には後世に虎溪三笑の一人として傳へらるゝ有名なる陸修靜がある。是の中、顧孟の二人は主として哲學的見地に立ちて融和を計り、陸陶二人は主として實際問題につきて調和を試みて居るやうである。而して佛教中に於ても、宗炳の『明佛論』に於て、

孔老如來、雖三訓殊路、而習善共轍也、縮藏露四<sup>ナ</sup>と説く如き、傳大士が道教の冠を戴き、儒教の履を着け、佛教の袈裟を披きて三教一致の服裝を示したりと傳へらるゝ如き、僧旻法師が儒を以て佛を釋する如き、馬樞の道覺論の如き、何れも融合一致の傾向を説明するものである。齊代沈約の均聖論に内聖外聖義均理一と云ふて居るのも其の意趣である。隋代の文中子、李之謙を待たずとも三教一致の趨勢は早く晋代より説かれて居るのである。

抑も道教徒にせよ、佛教徒にせよ書を著して三教一致の趣旨を發表したものは、何人であるかといふに、一般には『弘明集』第一卷に收めて居る牟子の『理惑論』を以て嚆矢と認めて居る。然るに是の著者たる牟子の履歴は少しも明らかでない。序文に依ると後漢の靈帝没後に在て南方に居住した居士のやうであるが、『後漢書』に出て居る牟融、牟紆などゝ比較して見るに、儒教に通じて居ることは似て居るけれど、年代は百年も隔たうて居る。而して是の文中に須大拏太子の因縁を引證して居る所を見ると、後漢代の人の著書とは認められぬ。須大拏太子の話が出て居るのは、『六度集經』吳康僧會譯西紀二六五年頃、『太子須大拏經』西秦聖

賢譯西紀三九二年頃『賢愚經』(元魏慧覺等譯、西紀四四五年頃等であつて、早くて三國の末遅くて六朝の初め頃でなくば是の談話を引證するほど是の話が傳はりて居ないのである。されば是の理惑論も寧ろ晋代に到りて世に顯れたものとするが至當であらふ。兎に角に佛教徒の側でも、道教徒の化胡說に對し正々堂々たる理論上より内聖外聖其の理一なりといふ見地に立ちて佛教を辯護し、孔老未到の眞理が、却て外來の佛教に依て補足せられたことを立言したのである。牟子の『理惑論』、著者未詳の『正誣論』、宗炳の『明佛論』すべて同一の趣旨に立ちて佛教の眞理を發揮したものである。

されば佛教徒の佛教本位の一致說到對し、道教徒の方でも道教本位の一致説を主張して居る。それは前に一言したる宋代顧歡(西紀四二四頃)の著したる『夷夏論』及び南齊代孟景翼(西紀四八二頃)の著したる『正一論』である。夷夏論の全文は『南史』に掲げられて居るが、その同致の旨を説ては、

泥洹仙化各是一術、佛號正眞、道號正一。一歸無死、眞會無生、在名則反、在實則合と云ひながら、優劣を論じては、

佛教文而博、道教質而精、精非粗人所信、博非精人所能、佛言華而引、道言實而抑、抑則明者獨進、引則昧者競進、乃至佛是破惡之方、道是興善之術。興善則自然爲高、破惡則勇猛爲貴。

云々

と説く、一致の旨を述ては二經に説く所は符契を合するが如し、道則ち佛也、佛則ち道也と喝

破せるに拘らず、舟は以て陸を走るべからず、車は以て水を渉るべからず、運載の用は一なれども用る所を誤るべからずと云ひ中夏は道教に適し、夷狄は佛教に適すと排斥するのである。孟景翼の『正一論』も、

聖人抱一以爲天下式、一之爲妙、空玄絶於有境、乃至強號爲一、在佛曰實相、在道曰玄牝、道之大象即佛之法戒。

といふやうに一致の旨を説けるに拘らず、歸する所は道教の擁護である。

夷夏論の説に對する宋の司徒袁粲の駁論が『南史』に出て居るのであるが、『弘明集』の卷六、卷七には、左の如き駁論が掲げられて居る。

#### 正二教

明僧紹(卷六)

與顧道士

謝鎮之(同)

#### 難顧道士

朱昭之(卷七)

諮夷夏論

朱昭之(卷七)

#### 駁夷夏論

慧通法師(同)

折夷夏論

僧敏法師(同)

陸修靜と陶弘景とは一致を公言しないけれど、事實上には最も兩教抱合の楔子を爲したものである。陸修靜の事蹟は明了でないが、北周代(西紀五七〇)に作られた『笑道論』に於て明かに宋明帝の時代の人であると傳へられて居るから西紀四七〇年頃に生存した人であつて、三元齋及び老君像を壇上に安置する等佛教の儀式を採用して道教に加味したことは、唐僧法琳の『辯正論』等に傳ふる所である。若し道教の教義上に對する功蹟を比較すると、恐らく寇謙之以上であらふ。宋代に道藏を整理した張君房の『雲笈七籤』に修靜の傳を記し道藏

整理の功今に到て法式となると讃して居る。唐僧彦琛の編成せる『法琳別傳』に依ると、修靜は道教經目を編し道藏の基礎を作つたものと見ゆる。それは宋明帝太始七年(西紀四七一年)であつて、其の目惣じて一千二百二十八卷に上り、その中、一百三十八卷丈は未だ人間に傳はらずと稱して居る。而して『辯正論』に依ると、修靜の著書として、

必然論一卷

榮隱論一卷

遂通論一卷

歸根論一卷

明法論一卷

自然因緣論一卷

五符論一卷

三門論一卷

の八論を擧て居る。是等の書は今日傳はらぬ故、いかなる教義を説たものであるか不明であるが、自然因緣といふやうな題目は正に老佛二教の術語を合併したものであつて、兩教混融の形迹を推察する事が出来る。いま道藏中に存して居る修靜の著書は『太上洞玄靈寶衆簡文』のみである。

陶弘景は梁武帝大同二年に八十五歳の長壽を保ちて没したのであるが、陶貞白、または陶隱居として文學界にも佛教界にも名を知られて居る。(西紀四五二——五三六)是の人は道士を標榜して立つたのであるが、其の説く所にも、行ふ所にも多量に佛教趣味を混じて居る。『南史』の傳中にも、勝力菩薩の號ありしことを掲げ、鄞縣の阿育王塔を拜して五大戒を受けた記してゐる。も臨終の際には大袈裟を蒙りたといふ事をも傳へて居るから平生に

佛經を讀み佛道を修行した事を推察せらるゝのである。四論宗及び淨土教で有名なる北

魏の雲鸞大士が遠く弘景の門を叩て仙法を學んだ事を傳へて居るが、あながち仙法のための談論でなく佛教々義の談論をも交換したのであらふ。其の著述なりと傳へらるゝ『眞誥』を見ると、後世混融時代に見る所の『呂祖全書』中にあるやうな文字が往々に見受けらるゝのである。殊に左の一文を讀て

南極夫人曰、人從愛生憂、憂生則有畏、無愛則無憂、無憂則無畏、昔有一人、夜誦經甚悲、悲至意感、忽有懷歸之哀、太上真人忽作、凡人徑往問之、子嘗彈琴耶、答曰在家時嘗彈之、真人曰絃緩何如、答曰不鳴不悲、又問絃急何如、答曰聲絕而傷悲、又問絃緩急得中如何、答曰衆音和合、八音妙奏矣、真人曰學道亦然、執心調適亦如彈琴、道可得矣、愛欲之大者莫大於色、眞誥卷六、之を姚秦弘始年中、西紀三九九年頃に譯出せられた『長阿含經』の

佛告帝釋、貪嫉之生皆由愛憎、愛憎爲因、愛憎爲緣、從此而有、無此則無。(乃至)愛憎之生、皆由於欲。(長阿含卷十)

及び符秦の建元二十年、西紀三八四年に譯出せられた『增一阿含經』の二十億耳尊者の對問一條を比較對照すべし。

尊者二十億耳、在靜處自修法本、中略、初夜、夜中、夜竟、夜、恆自勉勵、不捨斯須、然後不能於欲漏法心得解脫、乃至又我家業多、財饒實、宜可捨服、還作白衣、作沙門、甚難不易。爾時世尊遙知二十億耳心之所念、便騰遊虛空、至彼經行處、敷坐具而坐、是時尊者二十億耳、前至佛所、頭面禮足、在一面坐、爾時世尊問二十億耳曰、汝向何故作是念、乃至今作沙門、甚難不易、二十億耳對

曰如是世尊、世尊告曰、我今還問汝、隨汝報我、云何二十億耳、汝本在家時善彈琴乎、二十億耳對曰、如是世尊、我本在家時善能彈琴、世尊告曰、云何二十億耳、若琴絃極急、響不齊等、爾時琴音可聽、探不二十億耳對曰、不也世尊、世尊告曰、云何二十億耳、若琴絃復緩、爾時琴音可聽、探不二十億耳對曰、不也世尊、世尊告曰、云何二十億耳、若琴絃不緩、爾時琴音可聽、探不二十億耳對曰、如是世尊、若琴絃不緩、不緩、爾時琴音便可聽、探世尊告曰、此亦如是、極精進者猶如調戲、若懈怠者此墮邪見、若能在中者、此則上行、如是、不久當成無漏人。(增一阿含卷十三) 是の文を見れば、其の事實はすべて同一であつて、印度流に詳密に記述したのが『增一阿含經』であつて、是の事實を漢文流の簡潔な文字に意譯し、佛世尊を太上真人に換へたのは『真誥』である。前に掲げた從愛生憂の一段も、佛經より換骨奪胎したものであることは明了であつて、十二因縁を迷悟兩界に分ち、流轉還滅を論ずるものと同筆法であつて、終りに愛欲の本を色欲に置たのは、佛教の戒律に於ける見解と同一である。兩教混融の形迹は、『真誥』に於て明かに指摘し得るのである。

陶弘景の著述及び關係書は道藏中に左の六部を收めて居る。

華陽陶隱居集二卷

真誥二十卷

登真隱訣三卷

洞玄靈寶真靈位業圖一卷

養生延命錄二卷

華陽陶隱居傳三卷 賈嵩撰

是の他に南地に在て儒者にして佛教を崇拜したるは宋の顏延之、齊の周顒、梁の劉虬等の

如きあり僧侶にして方士術士と同一の術を弄したるものに于法開、實誌の如きがある。于法開は東晋代に在て、醫術と佛教とを併せ行ふた人である。實誌の如きは『南史』の著者が陶弘景傳中に附記する程であつて僧服にして道術を行ふた人であつたらしい。我國にても圖識の詩が實誌作として傳へらるゝ如く朝鮮にては今日でも實誌大士の秘經を信ずるものがある。

北地の方では魏武帝と周武帝(西紀五七八年)と兩度の破佛を蒙つたけれど、兩教混融の思想が絶無でない。『北史』に傳へらるゝ劉靈助傳中の沙門靈遠や檀特師の如きは、釋服道心の人であつたらしい。北魏の曇靖の如きは五行説を收容して二卷の提謂經を偽作して居る。儒士憑亮の如きは臨終に孝經を手にしながら死後に佛塔を起すべき事を遺言したと傳へらるゝゆへ所謂儒服佛心の人である。僧服を棄てゝ道士となつた周の衛元嵩の如きは、多量の佛教々義を道教經典中に注入したる一人である。天和五年(西五七一年)に造りた周武帝の二教鐘銘に弘宣兩教同歸一揆と云ひ、

二教並興 雙鑾同振 遠赴天霜 遙虧地鎮 陝河浮影 漢溪傳韻 聽響弘法 聞聲起信 共三(廣弘明集卷二十八)

と記されて居る所を見ると、武帝が排佛を斷行する迄には、兩教を混同せる思想を抱て居たものと見ゆる。

之を要するに六朝時代に於て、北方には二回の排佛毀釋を斷行して大に敎道の基礎を開



いたとは云へ、南方には盛んに三教融和の思想が發達し、兩教とも抱合融和の點を認むるのであるが、南北を問はず道教中に佛教の教義儀式を吸收し、予輩の所謂第三期の道教即ち近世的なる三教混同の道教を出現するに到りた起源は、方に是の時代に求めねばならぬ。

### 第五節 唐宋時代の概説

唐代に於ける道教は教義上に於て何等の新主義新發展を認めないのであるが、唐朝の李姓と老氏の李姓とを結合して天子は老子の末裔なりと宣言せしむるに至り、殆んど國教たるの待遇を受け、佛教の上位に立ちて、其の特色たる包容主義の教義を極端に露骨に應用したるは是時代である。彼の熾煌發見の『化胡經』に老君十六變化等を記し佛は勿論當時傳來の摩尼教をも包含して、老君が摩尼となつたといふ事を記して居るのも是の特徴を見るべきものであるが、彼の道教の經目を整理して、漢書藝文志に出でたるあらゆる諸子百家を取込んで自家の經典と稱し、四千卷五千卷の佛教大藏の數に對抗せんと試みたるも唐初の道士である。元來今日の道藏は四千二百卷と稱して居るけれど、葛洪の『神仙傳』『法琳別傳』引用に依るには凡そ一千卷とあり、陸修靜は一千二百二十八卷を數へて居るが、梁の普通四年(西紀五二三)に調査したる阮孝緒の七錄に依ると、

仙道錄 經戒部二百九十種八百二十八卷 服餌部四十八種一百六十七卷 房中部

十三種三十八卷 符圖部七十種一百三卷

右四部四百二十五種一千一百三十八卷(廣弘明集引用)

と記して居る。『隋書經籍志』は是よりも卷數が少し加りて一千二百十六卷と記して居る。

然るに唐初法琳法師(西紀五七二——六四〇)の記す所に依ると當時道觀に於ける道經は總じて六千三百六十三卷あり、其の中二千四十卷は現在その本が傳來すれど、殘る四千三百二十三卷は天宮に在て未だ世に出てず(辯正論第八と稱して居る。法琳の『辯正論』を作りたのは武德九年(西紀六二六年)であるが、それより一百四年も後に編集した『開元釋教錄』でさへ大小乘經律論及び聖賢集錄を合算して五千四十八卷と稱するのであるから、到底この道藏經目の六千幾百卷に比較することが出來ぬ。何事でも模倣して而も其上に出ることを心懸て居る道教徒の計畫としては最も得意の處である。『道藏目錄詳註』(道光二十五年編、西紀一八四五年)の説に依ると唐の天寶年間に道藏を編輯し三洞十二部統計百八十三萬八千三百八十卷を得たりと稱して居るのは、佛教徒の大本花嚴經等の説から思ひ付た虚説であるが、唐代に二千有餘卷の道藏は確かに存在したものであらふ。而も中宗時代(西紀七〇〇年)頃に崔湜沈佺期、薛曜道士史崇玄等の文學家を召集し、年數をかけて『三教珠英』といふ大著述を成功した事が『舊唐書』に記されて居る。是の書の卷數は何物にも記載せられず又現存の者でないから幾許の大著述であるものか久しく疑問を懷て居たが、計らずも『高麗史』第十卷を披て宋の哲宗(西紀一〇九五年)が高麗に善本珍書を探索する目錄を見出し、正に一千卷の大著述であつて、『文館詞林』一千卷と同一の運命に遭遇して居ることを知つたのである。然るに是書は岩殘の本も未だ見當らぬゆへ内容は推知し難いが、道教の盛時に道士を主と

して編纂したものであるから三教とは云ふものゝ道教主義の著書である。元來三教融合の思想は前言の如く早くから起つて居るが、三教談論と云て儒道佛の三教徒の學者を集めて講論する事が唐朝に於て甚しく流行した。六朝の宋、梁、魏、周の朝何れも行ふて居るが唐朝では殆んど一種の式典となつて居る。三教談論大德といふ僧官もある。僧圓仁慈覺大師の『入唐巡禮記』などを見ると、帝の誕生日には必ず三教談論を行ふたもので、而も道士は紫衣を着ても僧侶には許されないと稱して居る。(會昌元年の記、西紀八四一年、貞觀十一年、西紀六三七年、老君は朕の祖也といふ詔勅、唐彦琮撰、『法琳別傳』引用出てより道教一、佛教二といふ待遇を定めた。されば道教は地位に於て優勢であつたけれど、其の教義に於ては佛教の法相、華嚴、禪、真言等の盛況に比すべきもなく、寧ろ益々迷信を煽動して、丹藥を帝王に進め、女道士を天下に弘めて、房中術の道教盛んなりと稱せらるゝ次第となつた。佛教の方には單に註疏學があつたのみで、韓柳の文章の外見るべき學說が起つて居ない。唐代はまさに宗教全盛の時代である。宗派の數から云ても、景教、回教、摩尼教、祇教等あらゆる宗教の集注した時であつて、道佛二教徒の盛んなりし次第は、開元年間に成りし『唐六典』に、

凡天下觀總一千六百八十七所。一千一百三十七所道士。五百五十所、女道士。

凡天下寺總五千三百五十八所。三千二百四十五所僧。二千一百一十三所、尼。

と記せるにて察することを得べく、京師に於ける僧侶の多數であつたことは、會昌三年(西紀八四三年)の法難を目撃したる圓仁の記行に、

左街還俗僧尼共一千二百卅二人

右街還俗僧尼共二千二百五十九人

と注せられ、約三千五百の僧尼が京師西街に住したのである。

『千金方』の著者で有名なる孫思邈(太宗高宗兩朝代)は、三教兼學の道士であるが、藥方を作る前に必ず焼香禮佛せよと記す程であるから、深く佛理を味ふた人である。佛教の方でも禪家の『參同契』『五位頌』『證道歌』等その名に於て或は内容に於て儒道二教を混合したる事明白であるが、眞言の修法に於て符咒、又は急々如律令の文句を採用して民間信仰の融合を計りた事は不空、一行等の署名せる書中に見出す事が出来る。特に多くの類似點を有して後代に影響したものは禪宗である。唐朝に於ける著名の道士は劉進喜、李榮、傅奕、李筌、孫思邈、法明、吳筠、司馬承禎、葉法善、王珣、史崇玄、趙歸眞等であるが、佛教の方で對道士の運動をしたのは、法琳(破邪論、辯正論等)、作道宣(佛道論衡)、廣弘明集、道世(法苑珠林)、玄奘(甄正論)、彥琮(法琳別傳)等である。

宋代の狀況如何といふに、五代より宋代に互りては三教融合の形迹ます／＼明白となつて居る。而して宋代の終りに至るに隨ひ三教混合の度が甚だ強くなつて、殆んど近世風の道教と、其の内容が辯別し難いのである。五代の周世宗(西紀九五五年)が佛教家の稱する三武一宗の第四回目的排佛を行ふてより、宋初に回復して之を盛興したけれども、唐代のやうに新機軸を出すことなく、舊來の宗旨を維持するに汲々たる次第であつて、最も支那風に融

化した禪宗のみが教界を風靡して居る。而して儒教の性理學さへ禪の影響を受けて居ると稱せらるゝ程であるから、元來から、模倣主義、包容主義を取つた道教は、一層に禪味を帶び、その用語と云ひ著書と云ひすべて禪臭を帶び、語録體、偈頌風であつて、組織的に系統を立て論じた者が無い。而も陳希夷、杜光庭、張平叔、陳顯微等の著書を見ると、易理に依り、佛教を採り、稍や哲學的傾向を帶て居るのは所謂時代の潮流を顯すものであらふ。是の宋初に於て呂純陽といふ道士は、道教に於て重要な地位を占め、老子を道祖と呼び、呂祖、純陽を道宗と呼び、印度佛教に於ける釋迦老子と龍樹、呂祖との如き地位に置て居る。『呂祖全書』といへる叢書さへ出來て居るゆへに、其の尊崇せらるゝかゝ分るのであるが、是の呂祖は今尚ほ存在して時々その靈を現すること一般に信ぜられ、呂祖八十一化圖さへ出來て、老君化生と同視せられて居る。元の世宗は、孚祐帝君といふ號を諡して居るが、孚祐帝君註と稱する心經や金剛經が現今行れて居る。是が何れも清朝になつて出來たものであるが、扶鸞の法筆を吊して神意を受けて書くことに依りて記したものであるから、唐末宋初の時代の人でありながら、何時でも世に現出し得らるゝのである。予は友人稻葉君山君より、朝陽旅行の紀念に呂祖の肖像及びその自叙傳の拓本を贈られた。其自叙傳に依ると、唐から五代、宋、金、元、明と朝代の變遷を豫言して居る。是れ自から清人の記述たることを證するものであるが、『道藏輯要』に收めたる呂帝の『聖蹟紀要』を見ると、同一の叙文があつて、其の註に清朝の人に神がゝりして記さしめたものと云事を明記して居る。されど呂祖は全然架空の人物でなきこと

は、『宋史』卷四百五十七の隱逸傳陳搏希夷先生傳中に呂洞賓の記事あり、また紹興二十三年（西紀一一五三年）に編輯した『皇朝類苑』にも呂先生と題して其神仙なりしことを記して居る。咸淳六年（西紀一二六九年）に編せられた天台宗志盤の『佛祖統記』にも、『仙苑遺事』を引て、唐景宗天祐年間（西紀九〇四——六頃）の人とし、黃龍山機禪師と問答し遂に禪師に歸服したことを記して居る。されど是の呂祖が非常に大人物として崇拜せらるゝやうになつたのは、趙翼などの云ふ如く金の王重陽全真宗開祖から始まるのであつて、南北兩宗を開くといふ事も、唐代禪家の系統論を模倣せるに過ぎない。宋代に於ける道教の代表者と云へば、寧ろ杜光庭五代蜀の人（西紀九〇七年頃、元遺山文集に依る）張君房（西紀一〇一九年頃、張平叔（西紀一〇七五年頃、陳顯微（西紀一二三四年頃、葛長庚即白玉蟾、宋淳祐頃を擧げねばならぬ。是の諸子は何れも三教混合の製造人であつて、同時に今日の道教を開いた功勞者である。純思想家としては宋初に陳搏あり、純手腕家としては徽宗の師たる林靈素がある。『護法論』を作りて佛教の恩人と謳はるゝ張商英無盡居士（西紀一一一〇年頃、徽宗の相でさへ『金錄齋三洞讚詠儀』三卷、『金錄齋投簡儀』一卷を作りて道教を謳歌して居る。

葛長庚には白真人文集等がある。陳顯微には『參同契解』三卷、『文始真經言外旨』九卷、『道德真經纂微』十卷の著がある。張平叔には『悟真篇』、『金丹四百字註』、『虛靖真君語錄』等あり、『紫陽真人內傳』が出来てその行狀を傳へ、悟真篇は後來道教徒の哲理追究の唯一の聖典であつて、其の註譯書が凡そ六部、道藏に收められて居る。杜光庭に到りては逸すべからざる道教の

建設者であつて、凡そ二十餘種の著書が道藏中に收められて居る。其他、道藏中に署名せられずして佛典に擬し其教義を包容した經典は、多く是人の撰述に成るらしい。今左に署名ある書目を掲げ、并せて其文二三を擧て、いかに佛教々義を包容せるかを示さん。

太上洞淵神咒經二十卷

錄異記八卷

神仙感遇記五卷

洞天福地祿瀆名山記一卷

道德真經廣聖義五十卷

常清靜經註一卷

洞皇三皇七十二君齋方懺儀一卷

天壇王屋山聖跡記

太上洞神太元河圖三元仰謝儀一卷

道門科範大全集八十七卷

太上三洞傳授道德經紫虛籙拜表儀

壙城集仙錄六卷

廣成集十七卷

金籙齋啓壇儀一卷

太上靈寶玉匱明真齋懺方儀

太上靈寶玉匱明真大齋言功儀

道教靈驗記十五卷

太上洞淵三昧神咒齋懺謝儀一卷

歷代崇道記一卷

太上洞淵三昧神咒齋清且行道儀

その『太上三洞傳授道德經紫虛籙拜表儀』に曰く。

天堂與地獄 凡夫及聖人 悉從方寸起 非復有余因 悟則總朋友 迷爲愚瞽隣 苦魂猶有識 罪魂亦含神 何爲沈惱難 良由不信真 棄此身上寶 染彼世間塵 既依

流浪海 還沒死生津 若欲度此苦 安坐自觀身

張君房は宋代道藏の整理者で有名なる『雲笈七籤』の著者である。其中に收めたる文に、この杜光庭と同じく佛法の唯心説や法性論を包容して居る。今其中の一、二の文を掲ぐ。

仙籍語論要記(九十五)に法性虛妄を論じて曰く。

妙林經云天尊告度命眞士曰所謂安樂皆從心生、心性本空、云何修行知諸法空、乃名安樂、譬如愁人心意昏亂、煩毒熱悶於此人前、設諸幻術、木男木女、木牛木馬、羅列施張、作諸戲術、愁者見之如生、平牛馬相、息諸煩惱、心意泰然。我今亦爾、一切衆生虛妄愁毒、未能安樂、是故我說修諸功德、無量無邊及諸往生、不思議土、若知虛妄本無所有、一切衆生舉足行步、諸所作爲悉不思議、若知清靜自在、無礙心所求願、恣意充足、若有修善、當得往生三清妙土。如此方便止彼虛妄、而實未曾有彼三清常樂境界之所希望、若欲速得三清寶城常樂淨土、當以大乘無上慧心視我身相、從无量却因何法生、既知无因、乃知我以無我故、是我身常在三清常樂淨土。右の唯心説は六朝時代の經典にもある。太上洞玄靈寶消魔寶眞安志智慧本願大戒上品經に曰く(唐初破邪論引用)

太極左仙公於天台山靜齋念道稽首禮拜請問太極法師徐來勒曰(乃至)太極眞人曰、夫道無也、彌綸无窮、子欲尋之、近在我身、乃復有也、因有以入無、積念以得妙、万物芸々、譬於幻耳、皆當歸空、人身亦然、身死神逝、喻之如屋、屋壞則人不立、身敗則神不居、當制念以定志、靜身以安身、寶氣以存精、思慮兼忘、冥想內視、則身神並一、身神並一、近爲眞身也、此實由宿世本行、積念累



感、功濟一切、德應萬物、因緣輪轉、罪福相對、生死相滅、貴賤相使、賢愚相傾、貧富相欺、善惡相顯、其苦無量、皆人行願所得也、非道、非天、非地、非人、萬物所爲矣、正由心耳。(雲笈七籤に依る) 張伯端が三教を研究して、自から之が混融を企てたことは、『悟真篇』の自叙に詳かである。

## 第六節 結論

彼等尊重する現道藏は、現存目錄に、明萬曆年間の編纂とあるが、三洞四輔十二類と稱して居る。三洞とは洞真(大乘)、洞玄(中乘)、洞神(小乘)であつて之を三乘に分ち佛教の三藏に擬し、而も是の中各々に十二類ありて、本文、神符、玉訣、靈圖、譜錄、戒律、威儀、方法、衆術、記傳、贊頌、表奏と分ち恰も佛教の十二部經である。四輔とは太玄部、太平部、太清部、正一部であつて諸子百家の如きは、大抵是の四輔中に收めて居る。而も唐宋時代に朝廷の儀式などでは老子、莊子、列子、文子等を用て居るが、一般に尊んだのは陰符經、黃庭經、道德清靜經の如きものである。道德清靜經は其内容外形共に般若心經に似たものであるが、恐らく唐初に出來たもので、唐代の道教は是の經が代表して居る。宋末に道教を改革して近代風の基礎を立てた王重陽てさへ、道德清淨經と般若心經と孝經とを以て全真教の三部經と稱して居る。しかし近代風の教義を代表するものは宋末に出來たと察せらるる『太上感應篇』である。

道教中の諸術としては風水、唐の丘延翰、吳法明、六壬等許多の術がありて、隋代蕭吉の『五行大義』が其等諸術を發生する聖典であつて、我平安朝の時代には是書を以て陰陽生必讀の教科書と定めて居る程であるから、我國民間の迷信がすべて是書より發生して居ると云ふべ

きてある。六壬は『唐六典』にも民間普通の占法と定めたもので『郡齋讀書志』には、當時宋朝の民俗、一般に卜筮を棄て、六壬の占法を用ゆることを記し、明の謝肇淛は、六壬式の研究書數百部を藏すと記して居る。朝鮮にて現に専門に是術を行ふ者が多いと聞く。『和漢三才圖繪』にも其圖を示して居る。

要するに唐宋時代に於ては稍や哲學的傾向を帶て居るけれど佛教の哲理を取たもので更に特種の教理がない。其長所を云へば煉丹等諸術の用語を取て悉く哲學的に解釋した點にある。之に次で第三期に入ては、予輩が所謂混融時代であつて、混然として三教の教義を融和し一語一句と雖も三教の臭味を帶びざる無き有様となつて居る。新成の宗派丈けありて全真教、龍門宗の諸派は、恰も禪家の苦行靜坐と同じく、精神堅固の點に到ては寧ろ佛教徒を凌ぐものがある。元以後に分れた南北兩派の南方は張虛靖之を代表するので龍虎山に在て張天師幾代と稱することも張天師世家は『道藏輯要』及び『龍虎山志』に出づ、第一章に日本に傳はらずと云ふは誤り、宋代に始まつたのである。北方の全真教はその後二十餘派に分れて居るが、是の方が革新派であつて苦行を重んじ符咒衆術を排するものである。近代の道教を叙し及び其祭神、教義、倫理等の解説は、限りある紙上に記すべきにあらねば、是の稿は一と先づ茲處に筆を收む。(完結)